

3. 歴史的環境

(1) 歴史

人の定着から伊豆の国形成への足跡 〈旧石器～平安時代〉

ア 旧石器・縄文・弥生時代

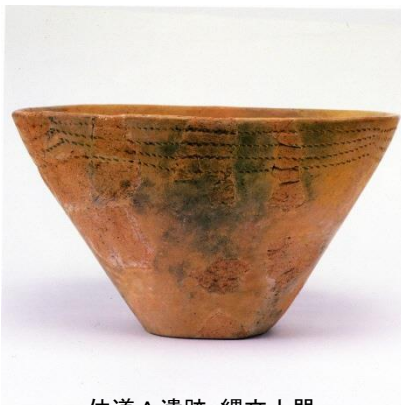
静岡県東部の愛鷹山南麓（沼津市・長泉町）や箱根山西南麓（三島市）は、旧石器・縄文時代の遺跡が集中する地域として全国的に知られている。伊豆の国市東部は、箱根山に連なる多賀山地西麓の丘陵地帯が占めており、韮山地域や大仁地域で旧石器・縄文時代の遺跡が多く分布している。

旧石器時代の遺跡は、大仁地域の笹子遺跡、江間地域の湯ヶ洞山遺跡がある。湯ヶ洞山遺跡では、ナイフ形石器・搔器・石核などが多数発見され、笹子遺跡では、いくつかの「ブロック」と呼ばれる集中箇所を形成していることが注目されている。旧石器時代の人々は、小集団で狩猟をしながら移動生活をおくっていた。

縄文時代になると、草創期～早期に次第に定住化の傾向がみられ、前期～中期に定住のムラをつくるようになる。大仁地域の浮橋・長者原などの丘陵部や狩野川段丘上の田京・三福一带は、縄文時代の集落が多く、伊豆半島における中心地のひとつに位置づけられ、三福の仲道A遺跡の復元土器2点を含む草創期縄文土器等、貴重な遺物が出土している。

弥生時代になると、人々は水田耕作に適する低地部に居住地を移すようになり、韮山地域西部や長岡地域などに多くの遺跡が見られる。伊豆の国市の弥生時代遺跡は、江間地域の八ツ島遺跡、東部山間地域の奈古谷低地遺跡や神崎遺跡など、水田遺構が多く発見されていることで知られ、韮山地域の山木遺跡は、弥生時代の集落遺跡として、静岡市の登呂遺跡と並び称される遺跡である。おそらくこの時期の集落は丘陵の縁辺部や自然堤防上に存在したと思われる。この頃になると集落・集団格差が生まれ、有力集団の中でも階層の分化が進み、やがてそれらの中心指導者が、豪族や首長へと成長していったのであろう。

また、人々の暮らしにとって水は必要不可欠なものであり、原始・古代の遺跡の多くは、狩野川もしくはその支流を中心に分布している。さらに弥生時代、水田耕作が行われるようになると、生業の面からもさらにその重要性は増すこととなった。



仲道A遺跡 縄文土器



山木遺跡 出土遺物

イ 古墳・奈良・平安時代

豪族・支配者層の出現とともに、伊豆の国市内でも5世紀から7世紀にかけて丘陵部や台地の先端部に前方後円墳・円墳などがつくられるようになる。7世紀後半から8世紀前半にかけては、江間や大仁では、崖面に横穴を掘った横穴墓群がつけられる。

律令時代に入ると、天武9年(680)に駿河国から伊豆国が分置され、大宝令公布(701年)の頃、田方、那賀、賀茂の3郡が分かれ、伊豆の国市には田方郡が置かれた。また、仏教が東国にも普及し、宗光寺が建立され、伊豆国分寺の瓦が市内の瓦窯で生産された。奈良時代前半の神亀元年(724)には安房等とともに伊豆国は遠島の地となり、政争の敗者たちが流人として伊豆に送られている。

また、伊豆国の国府が三島に置かれると、国府と伊豆国の南地域を結ぶ下田街道が整備される。伊豆国内の租庸調は、下田街道または狩野川を通じて国府に集められ、さらに西の都に運ばれた。

現在も見られる遺跡は、東部山間地域では16基からなる多田大塚古墳群、江間地区では「若舎人」の文字が刻まれた石櫃が出土し、多様な墓制をもつ北江間横穴群、長岡地区では横口式石槨という東日本ではまれな埋葬設備をもつ洞古墳に「白石の石棺」という石槨が残存している。他にも市内唯一の前方後円墳である、特徴的な人物埴輪が出土している駒形古墳、三島市にある伊豆国分寺の瓦等を生産した花坂古窯群、大仁地区の小規模な群集墳(古墳時代後期から終末期)である平石古墳・横山段古墳群・富士見夫婦塚古墳群がある。平石古墳等の発掘調査によって、神島にある笠石山洞穴遺跡(古墳時代中期)の埋葬施設であったことが確認された。

大仁地区の広瀬神社は、平安時代の「延喜式神名帳」に見られる古社で、三島神の後神といわれる三島溝織姫命を祀る、神階帳従一位広瀬の明神といわれた。また、同時期の集落は市内各所で見つかっている。



北江間横穴群



白石の石棺



駒形古墳出土人物埴輪

武士の世のはじまり、中世関東動乱の要の地 〈鎌倉・南北朝・室町時代〉

ア 鎌倉時代

①鎌倉幕府草創の地

治承4年(1180)、源頼朝の挙兵から鎌倉幕府創立が契機となって、日本の中世、いわゆる武士の世がはじまったといわれる。頼朝の挙兵の地は、伊豆の国市であった。

永暦元年(1160)、平治の乱に敗れた源頼朝は伊豆韮山の蛭ヶ小島に配流され、この地の豪族北条時政の娘、政子と結ばれた。後に尼将軍と称され、日本史上に名を残す女性となる政子と頼朝の結婚が、伊豆韮山を中世史の幕開けの表舞台に登場させることになる。

治承4年(1180)8月、頼朝は以仁王の令旨を奉じて挙兵し、平家方の山本兼隆の館に夜襲をかけ、兼隆を討ち果たした。その後、石橋山の敗戦などはあったが、東国の源氏ゆかりの武将たちの支援を得て、鎌倉幕府を樹立した。

頼朝亡き後は、頼家、実朝が2代、3代将軍に擁立されるが、いずれも暗殺された。尼将軍政子と弟の義時は、京から幼い将軍を迎えたが、名目的な存在であり、幕府の権力は北条氏が握った。その後、承久の乱(1221年)を経て、北条氏の権力は絶大なものとなり、数代に渡って他の有力御家人を排除しつつ、執権として幕府の中樞を掌握した。それとともに北条氏の本拠地である守山地区は大いに栄え、その結果、北条氏邸跡や願成就院跡など、北条氏ゆかりの遺跡が多く残ることとなった。

②鎌倉時代の遺跡と関連文化財

狩野川と下田街道に挟まれた北条氏邸跡から出土する、中国大陸や東海地域西部でつくられた陶磁器は、太平洋から狩野川を経て、館にもたらされたと考えられている。さらに、鎌倉の寺院造営の用材として、伊豆の木材が運ばれたことも文献に残っている。木材は天城山中から切り出され、狩野川を通じて沼津に運ばれたとされる。

北条氏の館跡である北条氏邸跡(円成寺跡)(国指定史跡)は、守山地区北側に展開し、平成4年(1992)からつづく発掘調査によって、規則的に並ぶ建物跡や中国陶磁器、大量のかわらけなどが出土し、平安時代末から鎌倉時代の武士の館跡が明らかになった。北条氏邸跡の遺構と重なるように、円成寺の遺構が発見されている。発掘調査では堂や池がみつかり、仏具などの出土品も多数発見された。

北条氏の氏寺である願成就院(国指定史跡)は、吾妻鏡によれば、文治5年(1189)

源頼朝の奥州藤原氏攻めの成功を祈願して建立されたと記されている。木造阿弥陀如来坐像他、運慶製作による仏像5体(国宝)が伝わっている。仏像の胎内からは銘札が発見され、文治2年(1185)、北条時政の発願により運慶が製作したことが書かれている。造立年代は吾妻鏡の記事との食い違いが生じており諸説あるが、いずれにしても北条氏の氏寺として建立され発展していった寺であることは明らかである。



願成就院 山門

発掘調査も行われており、堂の一部や屋根に葺かれた多数の瓦がみつまっている。

堀越公方足利政知の御所であった伝堀越御所跡（国指定史跡）は、発掘調査によって池や遣水などが発見され、京ゆかりの公方の雅な暮らしの一端が明らかになっている。

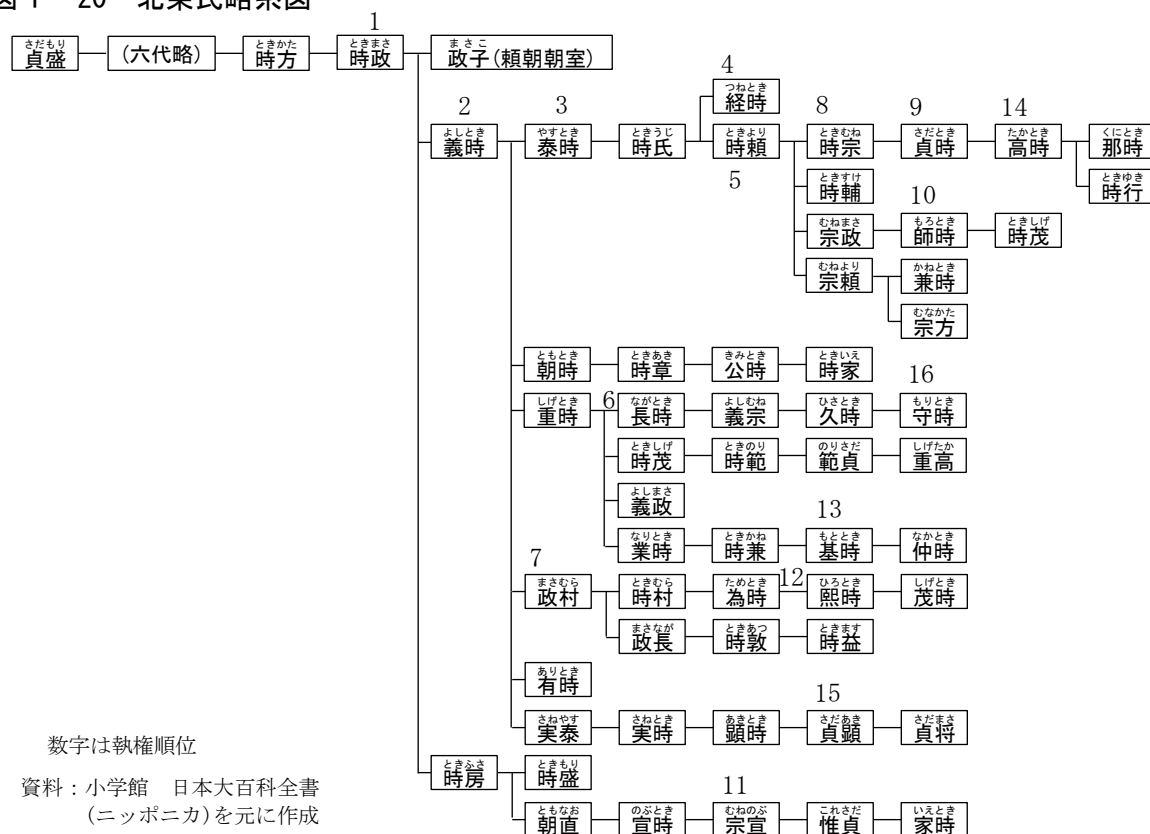
この他、守山地区には中世から続く寺院が多い。頼朝邸跡と伝えられる光照寺、武田信光の伝承をもつ信光寺など、中世史と深い関わりをもつ。また、石塔も多く残されており、眞珠院の中世在銘石造物群（市指定文化財）のうち、定仙大和尚塔と呼ばれる五輪塔には「正安4年（1304）」の銘が刻まれている。この紀年銘は静岡県内の五輪塔に刻まれたものでは最も古い銘である。

山木兼隆館跡推定地や源頼朝の配流地である蛭ヶ小島比定地は、葦山地域に含まれる。蛭ヶ小島には、寛政2年（1790）、秋山富南の撰文により建立された蛭島碑（市指定文化財）が建てられている。

江間地区には、江間小四郎と呼ばれた北条義時の館があったとされる。北條寺には北条義時夫妻の墓（市指定文化財）が残されている。北條寺には、鎌倉時代はじめ頃に製作された阿弥陀如来坐像（県指定文化財）や室町時代に宋風様式を取り入れた観音菩薩像（県指定文化財）などもある。また、牡丹鳥 獣文 緞帳（県指定文化財）は北条政子の寄進と伝えられる。

古奈温泉は、鎌倉～室町時代から知られた温泉であり、吾妻鏡には嘉禎2年（1236）、將軍藤原頼経が小名（古奈）温泉へ行く計画があったこと、仁治元年（1240）、幕府の医者である丹波朝臣良基が小名温泉で死去したことなどが記されている。

図1-20 北条氏略系図



①円成寺と堀越御所

元弘3年(1333)鎌倉幕府滅亡後は、実質的な最後の執権である北条高時の母「覚海円成」が、北条一族の子女をつれ、北条氏のふるさとしてある守山の地にもどり「円成寺」を建立した。「円成寺」の跡は、北条氏邸跡と重複して発見されている。室町時代には、円成寺は伊豆国守護山内上杉氏の庇護のもと、由緒ある寺院に発展した。



北条氏邸跡（円成寺跡）

南北朝の動乱期から室町時代になっても、伊豆韮山の地は関東支配の重要拠点として重視された。初代鎌倉公方足利基氏の補佐役であった畠山国清や関東管領を世襲する山内上杉氏が代々伊豆守護に任命された。上杉氏は奈古谷の国清寺を建立し、その一帯を伊豆の本拠地とした。

室町時代の長禄元年(1457)、京の将軍足利義政の兄、足利政知が新たな鎌倉公方として下向してきた。しかし、うち続く東国の動乱のため、鎌倉入りを果たせず、韮山堀越の地に「堀越御所」を構え（堀越御所跡）、堀越公方と称した。政知は延徳3年(1491年)に没し、その子茶々丸が跡を継ぐが内訌が相次ぎ、伊豆国は内乱状態に陥った。明応2年(1493)、北条早雲(伊勢新九郎盛時・宗瑞)が伊豆に侵攻し、堀越御所を襲撃して茶々丸を滅ぼし、伊豆国を平定した。この堀越御所の跡は「伝堀越御所跡」として国の史跡に指定されている。

②国清寺と毘沙門堂

東部山間地域の奈古谷の中心に位置する国清寺は、南北朝以降伊豆国守護となった関東管領山内上杉氏が、無礙妙謙を開山に迎えて暦応年間(1338～1342)に創建した氏寺である。境内には創建に関わる「妙謙」の名を記した貞和4年(1348)銘の宝篋印塔をはじめ、14～15世紀の石塔が残されている(「開山塔」・「開基塔」など)。国清寺周辺は、上杉氏の伊豆における最大の拠点であり、守護所に準じる場所であった。そのため、上杉禅秀の乱や永享の乱の折など、鎌倉における政争の歴史の舞台のひとつとなっている。また、堀越公方足利政知が一時拠点としたこともあった。

国清寺周辺には国清寺本堂の木造釈迦如来像(県指定文化財)、毘沙門堂門の木造金剛力士像(県指定文化財)、豆塚神社の鰐口、観音堂十王像(市指定文化財)など、重要な美術工芸品が存在する。

また、国清寺から毘沙門堂に向かう道筋には、地藏像や種字を刻んだ磨崖仏(市指定文化財)が多く存在する。至徳2年(1385)銘の弘法石、明德2年(1391)の大日石など、年号が刻まれているものもあり、歴史的価値も高い。石塔類も多く、市内では守山周辺に次いで集中して分布する。かつて国清寺の子院であった徳隣院・松月院、観音堂境内、慈光院の他、道沿いや個人宅に祀られている例も見られる。

③南北朝・室町時代の関連文化財

源頼朝の挙兵に従った天野遠景^{あまのとおかげ}は、長岡地区の天野を本拠とする武士である。頼朝から最も信頼されていた家臣のひとりで、後に鎌倉幕府が九州の御家人を統制するために設置した鎮西奉行^{ちんせいぶぎょう}に任ぜられる。東昌寺には、天野氏の墓（市指定文化財）といわれる石塔が残されている。

長岡地区の寺には、平安時代～鎌倉時代の歴史に関わる伝承が多く残る。西琳寺^{さいりんじ}には、以仁王^{もちひとおう}とともに京で反平氏の兵をあげた源頼政の妻である菖蒲御前^{あやめごぜん}の宅跡（市指定文化財）、最明寺には5代執権北条時頼の墓（市指定文化財）と伝えられる石塔がある。宗徳寺の卷子本「紺紙金字法華経^{こんしきんじほけきょう}」十卷（県指定文化財）には、建治2年（1276）の年号が記されている。

南北朝の康安元年（1361）、鎌倉公方足利基氏に背いた畠山国清^{はたけやまくにきよ}は大仁地域神島にある神益城（金山城）、三戸城（三津城）、立野城（修善寺城）に立て籠もり鎌倉軍と戦った。神益城の場所については、城山（標高342m）とする説と、棒石山（標高121m）とする説があり特定されていない。また、龍源院の一角には脇屋義治^{わきやよしはる}を祖とする脇田家一族の墓所がある。脇屋義治は南北朝期に活躍した新田義貞の甥である。

蔵春院はかつて修禅寺・最勝院とともに伊豆の三名刹といわれた。永享11年（1439）、主君足利持氏を死に追いやった関東管領上杉憲実^{えいしきやう}は、持氏追悼の寺として蔵春院を建立した。

山木兼隆館跡推定地や源頼朝の配流地である蛭ヶ小島比定地は、葦山地域に含まれる。蛭ヶ小島には、寛政2年（1790）、秋山富南^{あきやまふなん}の撰文により建立された蛭島碑^{ひるがしまひ}（市指定文化財）が建てられている。また、円成尼が鎌倉東慶寺に寄進した梵鐘^{ぼんしょう}（県指定文化財）が葦山地区の本立寺^{ほんりゅうじ}に残されている。

戦国時代の幕開けから天下統一布石の地へ 〈戦国・安土桃山時代〉

伊豆国を平定した北条早雲（伊勢新九郎盛時・宗瑞^{そうずい}）は葦山城を築城し、同城を本拠とした。その後、相模国西郡を支配する大森氏から小田原城を奪い、こののち関東一円を支配する後北条氏5代100年間にわたる関東統治の基礎を築いた。2代氏綱^{うじつな}は本拠地を小田原城に移すが、葦山城はその後伊豆支配のための支城として存続し、対今川、武田の最前線の拠点として重要視された。

天正18年（1590）、四国・九州を平定した豊臣秀吉は、天下統一の最後の仕上げとして、小田原攻めを実行する。小田原攻めに際しては、葦山城は山中城・足柄城とともに、防備を固めるが、徳川家康の勧告により開城した。後北条氏の敗北、葦山城・小田原城の開城は、戦国時代の終焉を告げるとともに、豊臣政権の天下統一の完成であった。

後北条氏滅亡後、伊豆は徳川家康の領国となり、家臣であり家康の異母弟ともされる内藤信成が葦山城に入り、検地を実施するなど荒廃した伊豆の復興に努めた。関ヶ原合戦後の慶長9年（1601）、内藤信成は駿河に転封し、葦山城は廃城となった。

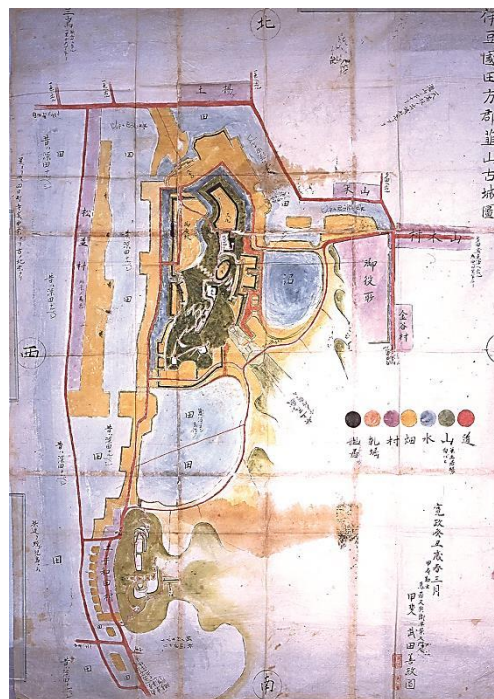
葦山城築城とともに、戦国時代の伊豆の国市の中心は、葦山城区域に移る。葦山城の外縁地域として、奈古谷多田区域、守山区域の下田街道付近などに関連文化財が分布する。

葦山城跡は、本城とそれらを取り囲む丘陵地帯を含む 94 万 m² の広大な城郭である。本城や丘陵には、土塁や堀など当時の遺構が良好に残っている。低地部分では、発掘調査が行われており、堀や屋敷地、道路、庭園跡などがみつっている。東側の丘陵部には、豊臣軍が築いた付城が残っている。現在、太閤陣場付城、本立寺付城、追越山付城、上山田付城、昌溪院付城の 5 つの付城が埋蔵文化財包蔵地になっている。葦山城と付城群をあわせて、天正 18 年（1590）の攻防が遺跡として残っている点が重要である。

本立寺は、永正 3 年（1506）江川家 24 代英盛が邸内にあった大乘庵を移して建立された。境内に 16 世紀代の石塔残欠が残っている。香山寺は、山木判官平兼隆建立の寺といわれているが明らかではない。境内に六地藏石幢や石塔残欠が残っており、北条早雲（伊勢新九郎盛時・宗瑞）が再興したという伝承もある。また、葦山城東側の金谷、山木の集落は、古いたたずまいを残しており、葦山城の内宿（城下町）であった可能性が指摘されている。

戦国時代になって国清寺は前代よりも衰えたが、寺が抱えていた職人集団はこの地に残った。後北条氏はこれらの職人を城の整備や経営を支える集団として組織したことが文献史料から知られている。

下田街道は戦国時代においても交通・流通の動脈であった。四日町には市があり、後北条氏の蔵が建てられていた。四日町の市は、傀儡（人形つかい）も集まるような賑わいのある市であり、永禄 12 年（1570）に武田氏が葦山城を攻めた時には、市周辺に火をかけられている。天正 18 年（1590）の豊臣軍の葦山城攻めの折には、願成就院に狼藉を防ぐための制札が出された。



伊豆国田方郡葦山古城図
（公財）江川文庫蔵

図 1-21 近世の下田街道



幕府直轄の代官支配地 〈江戸時代〉

近世を通じて葦山代官を世襲した江川家の先祖、江川英長は天正 18 年（1590）豊臣秀吉による後北条攻めの際、徳川家康の旗本として葦山城攻めに加わった。そのことにより、徳川家康の関東入部後は、旧領 5 千石余を支配する代官として存続した。また江川家は、戦国・江戸初期を代表する銘酒「江川酒」の酒造家としても活動していた。

江川家の屋敷である「江川家住宅」は、およそ 400 年前に建てられたと推定されている主屋をはじめ、書院・仏間・門・土蔵などが国の重要文化財に指定されている。また、江川家住宅の敷地を含む一帯は、江戸時代から明治時代中頃まで、地方行政における中心的な役割を果たした場所として、史跡葦山役所跡となっている。

徳川家康の関東入部後、葦山城には 1 万石で内藤信成が入り、葦山藩が成立した。内藤信成は、慶長 6 年（1601）に駿府に転封となるが、それまでの間、各地で検地を進めるなど、近世的な支配体制の基礎を築いた。内藤の転封後は、大名が配置されることはなく、葦山城は廃城となった。

元禄期（1688～1704）には、江川家は三島代官と並立する吏僚的代官（葦山代官）となり、宝暦 8 年（1758）の三島代官廃止後は伊豆・駿河・武蔵・相模の天領を支配する葦山代官職を世襲して幕末を迎える。

幕末期に活躍した江川太郎左衛門英龍（坦庵）は、葦山代官として管轄地の民政に尽力したほか、幕府海防政策の担当者として、多くの業績を残した。天保 6 年（1835）葦山代官になった英龍は、渡辺崋山や高島秋帆に師事し、蘭学や西洋砲術を積極的に取り入れ、その普及に努めた。安政元年（1854）の安政大地震により大損傷を受けたロシア軍艦ディアナ号乗組員の救出にあたりとともに、代船として、伊豆戸田で建造された日本初の洋式帆船（ヘダ号）建造についても大きな役割を果たした。さらに、軍隊の兵糧としてパンを製作したことから、今日「パン祖」としても知られている。また、英龍の代表的な業績として知られているのが、葦山反射炉と品川台場の築造である。葦山反射炉は、品川台場に配備する鉄製砲の鑄造を目的に造られた金属溶解炉で、嘉永 6 年（1853）のペリー艦隊来航を受けて、幕府により築造が決定され、安政元年（1854）6 月に起工。安政 4 年（1857）11 月に竣工し、鉄製カノン砲や青銅製野戦砲の鑄造が行われた。

市域の中央を流れる狩野川は古くから水運に利用されてきたが、江戸時代中頃に葦山地区から河口部の沼津にいたる舟運が開設され、大型の川船が運航されるようになり、年貢米のほか多くの物資が行き交うようになった。また、狩野川は上流部天城山麓で伐り出される材木の搬送ルートとしても使われた。

陸上交通では、江戸時代、東海道三島宿、三島大社を起点に下田に至る下田往還が通っていたが、途中、天城山が半島を南北に分断していたため整備が遅れ、往来が盛んに



江川家住宅 書院



江川家住宅 土蔵

なるのは江戸時代中期以降のこととされる。幕末、ペリーが来航し下田港が開港されるに至り、東海道と下田を結ぶ下田街道の重要性がさらに増すこととなる。

近代産業への飛躍の地 〈幕末・明治・大正・昭和時代〉

ア 幕末・明治（新たな時代へ）

明治維新にあたり、^{ひでたけ} 葦山代官江川英武はいち早く新政府に帰順し、旧支配地の行政機構はそのままに、伊豆・武蔵 17 万石を管轄する葦山県（初代知事：江川英武）が誕生した。

明治 4 年（1871）末の廃藩置県によって葦山県は解体され、相模国西半・伊豆国を合わせて足柄県に再編成された。初代県令には、^{かしわざただとし} 江川坦庵の部下であった柏木忠俊（葦山代官手代出身）が任命されている。柏木は明治初期に産業や教育などの様々な面で開明的政策を実施した人物として、また、県立葦山高等学校の基礎を作った人物としても著名である。

明治 9 年（1876）、伊豆国は静岡県に編入され、足柄県は廃止となった。その後、明治 22 年（1889）の市制・町村制施行により、現伊豆の国市域の村々は川西村（旧伊豆長岡町）、田中村（旧大仁町）、葦山村（旧葦山町）となり、今日に続く行政単位としてのまとまりが成立した。

明治 32 年（1899）には三島・田中村間に^{ずそう} 豆相（駿豆）鉄道が完成し、終着駅の大仁駅は、そこから馬車で修善寺・天城・中伊豆方面に向かう人々で賑わった。また木炭や蚕糸など物流の集積場としても栄え、大仁駅周辺には警察署や裁判所、病院などが作られた。

また「湯出づ国」が伊豆の語源になったという説があるほど温泉の多い伊豆半島でも、中世から続く^{こな} 古奈温泉（旧伊豆長岡町）は、明治 24 年（1888）の全国温泉番付東前頭 10 枚目に位置づけられ、修善寺、熱海に次ぐ知名度があった。

長岡温泉（旧伊豆長岡町）も明治 40 年（1907）に発見され、古奈温泉とともに、伊豆長岡温泉として、伊豆を代表する温泉場となっている。

明治後期に至り、^{やまださぶろう} 江川英武の女婿山田三良（帝国学士院長）を中心として葦山反射炉の保存運動が展開され、それを受けて、明治 41 年（1908）に陸軍省による保存修理が行われ、保存への道が開けた。



葦山反射炉

イ 大正（産業の発展）

大正 13 年（1924）駿豆鉄道は修善寺駅まで延長されたが、旧大仁町には間宮堂（後の東芝テック大仁事業所）や、東洋醸造（後の旭化成ファーマ）など、戦前戦後を通じて大規模な事業所が立地し、工業の盛んな地域として発展した。

陸軍省により保存修理が行われた葦山反射炉は、大正 11 年（1922）3 月 8 日に国の史跡に指定され、以後数回の大規模な保存修理を経て、現在に至っている。

ウ 昭和(災害・戦争・復興)

近現代における大規模な災害としては、昭和 5 年(1930)の北伊豆地震、昭和 33 年(1958)の狩野川台風があげられる。北伊豆地震では、伊豆の国市が立地する田方平野に、死者 255 人を数える甚大な被害をもたらした。この時の地震の揺れが魚雷の表面に記録されたものが、国指定天然記念物「地震動の擦痕」である。



地震動の擦痕

昭和 10 年代に入り、日本が日中戦争、太平洋戦争へと突き進む中、当市域でも戦時体制が取られ、市民にも多くの戦争犠牲者がでた。

昭和 20 年(1945)の敗戦から、戦後復興、高度成長時代にかけて、伊豆長岡町は温泉を中心とした観光業、大仁町は東洋醸造や東芝テックに代表される工業、菰山町は米作やいちごのハウス栽培などの農業というように、それぞれ特徴ある発展を遂げてきた。

昭和 33 年(1958)の狩野川台風においては、豪雨と狩野川の堤防決壊により、死者・行方不明者 1269 人という記録的な被害を出した。

エ 平成(平成の合併)

平成 4 年(1992)頃からのバブル景気の後退を受けて、各町とも税収が減少し、近隣市町との合併を模索することとなった。平成 15 年(2003)10 月、三町による合併協議会が設置され、この合併協議会での協議を経て、平成 17 年(2005)4 月、伊豆長岡町、大仁町、菰山町が合併し、「伊豆の国市」が誕生した。

平成 27 年(2015)7 月、日本における近代的な製鉄技術導入の黎明期を象徴するものとして、菰山反射炉が「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産となり、世界文化遺産に登録された。

伊豆の国市の歴史文化の特性

伊豆の国市は、全国との関わりの強い歴史を豊富に持つ地域であり、その遺産が市域の中に幾重にも重なる形で残されており、現代における歴史文化資源となっている。

国指定の史跡だけでも、北江間横穴群、北条氏邸跡(円成寺跡)、伝堀越御所跡、菰山役所跡、願成就院跡、菰山反射炉と、古代から幕末・維新时期に及ぶ価値の高いものが集積している。それらは、日本の歴史の転換期に大きく関わっており、伊豆の国市民が全国に誇れるものである。そのほかにも、国指定重要文化財、天然記念物、登録有形文化財や、県指定の文化財も多く、市指定のものも含めて、指定文化財は 59 件に及んでおり、未指定のものも含めれば多種多様な文化財の宝庫といえる。それら資源の蓄積状況や、それを取り巻く環境条件等から、伊豆の国市の歴史文化の特性は大きく次の 2 点に整理できる。

ア 重層的に蓄積する歴史文化と時代の変革の端緒を開いた地域

市内に残されている歴史文化遺産の築かれた時代は多岐にわたり、何度も日本を動かす歴史の舞台になってきた地域である。様々な時代の史実に基づく豊富な遺産が共通のエリアの中で重層的に蓄積することで、深みのある歴史文化が構成されている。

特に、平安時代から鎌倉時代への変革（頼朝挙兵）、室町・戦国時代から天下統一への画期（堀越公方・後北条氏の拠点）、そして江戸期から明治維新（江川家・韮山反射炉）と、我が国の歴史の大きな変革期において、その端緒となった地域であると言える。

イ 狩野川を軸とした自然に育まれた歴史

伊豆の国市は、伊豆半島の要に位置し、代官所や韮山県庁が置かれた歴史も持つ。狩野川・下田街道は歴史を通じて伊豆の南北方向の中心軸であり、人や文物の交易を担ってきた。狩野川や周囲の山々などの自然は、富士を間近にのぞむ景観を提供しつつ、時に脅威となりながらも恵みともなって歴史文化の舞台としての環境を形成している。

(2) 伊豆の国市の歴史に係る主な人物

ア 源頼朝【久安3年(1147)～正治元年(1199)】・政子【保元2年(1157)～嘉禄元年(1225)】

平治元年(1159)12月、平治の乱に敗れた源頼朝は、平氏に捕らえられたが、平清盛の継母池禅尼の嘆願で一命を助けられ、永暦元年(1160)年3月11日、14歳で伊豆えいりやく菰山ひるがの蛭ヶ小島こじまへ流された。伊東祐親、北条時政らの監視を受けながらも、八重姫との恋愛、天城の巻狩り、箱根・伊豆山・三嶋大社への参拝などをし、やがて時政の娘政子と結婚。治承4年(1180)



蛭ヶ島公園から富士を仰ぐ頼朝・政子の

8月17日、平家追討のため、三嶋大社の例祭を期に挙兵し、国司に代わって伊豆に派遣されていた平家の目代、平兼隆もくだいを打ち取る。その後、弟義経の活躍や東国武士団の協力により、ついに平家を打倒。建久3年(1192)7月、頼朝は、天皇から征夷大將軍に任ぜられた。

北条政子は、保元2年(1157)伊豆菰山の豪族北条時政の長女として生まれる。成長した政子は、蛭ヶ小島に流されていた源頼朝と出会い、妻となる。頼朝の死後は出家し、北条時政・義時父子とともに2代將軍頼家・3代將軍実朝の後見となった。承久3年(1221)に起こった承久の乱では、関東御家人を督励し、後鳥羽上皇の討幕計画を失敗させたので、「尼將軍」とも称されている。

イ 北条早雲ほうじょうそう'un えいき'you えいし'you【永享4年(1432)～永正16年(1519)】

北条早雲ほうじょうそう'un い'せ しん'く ろうもりとき そうずい えいき'you(伊勢新九郎盛時・宗瑞)は、永享4年(1432)(一説に康正2年(1456)とも)に生まれる。今川氏との縁で沼津の興国寺城主となった。明応2年(1493)秋、今川氏の軍勢を率いて、菰山めい'ouの堀越公方の館を襲撃。足利茶々丸らを破り、菰山城を築城し、ここを本拠地としてその後伊豆の国を平定した。これが関東の戦国時代の幕開けとなった。文亀2年(1502)からは相模国を攻め、伊豆・相模両国に支配を拡大した。早雲は、永正16年(1519)8月15日、菰山城で没す。修禅寺で荼毘にふされ、のち早雲寺(神奈川県箱根町)に改葬された。「早雲寺殿二十一箇条」は、彼の制定した家訓として広く知られている。



北条早雲像
(長谷山法泉寺蔵 岡山県井原市)

ウ ^{え がわひでたつ}江川英龍【享和元年(1801)～安政2年(1855)】

江川家第36代当主江川太郎左衛門英龍（号を^{たんなん}坦庵）。享和元年（1801）、^{え がわ た ろ う ざ え もん ひで た つ}葦山代官江川英毅の二男として葦山に生まれる。天保6年（1835）父の^{ひでたけ}跡を継ぎ、葦山代官になった。英龍は、代官として、幕府直轄地の民政に高い能力を発揮しただけでなく、ペリー来航後は、海防政策の実務責任者として、西洋砲術の普及・葦山反射炉建設・品川台場築造などに活躍した。また、書画・詩文をよくし、多くの作品を残している。安政2年



江川坦庵像

（1855）没。英龍は、日本で初めてパンを焼いたことから、「パン祖」としても知られている。また、地元の静岡県立葦山高等学校では、英龍を学祖として仰いでいる。

4. 文化財等の分布状況

伊豆の国市において、国・静岡県により指定され、保護が図られている文化財は、国指定が13件（内国宝が1件）、県指定が11件、合計で24件ある。この他、市指定文化財が32件、国登録の文化財が3件、合計59件の指定文化財と国登録文化財がある。

1～122番の文化財の一覧表は、巻末の資料編とする。

表1－2 指定文化財の件数

種別			国指定		県指定	市指定	計
			国宝	重文			
有形文化財	建造物			1	1		2
	美術工芸品	絵画			1		1
		彫刻	1		5	3	9
		工芸品			2	1	3
		書跡・典籍・古文書			1	2	3
		考古資料		1	1	2	4
		歴史資料		2		7	9
民俗文化財	有形民俗文化財	衣食住に用いられるもの		1			1
	無形民俗文化財					4	4
記念物	史跡			6		10	16
	天然記念物			1		3	4
計			1	12	11	32	56

表1－3 登録文化財件数

種別	件数
登録有形文化財(建造物)	3

(1) 主な国指定文化財

ア 国宝 願成就院の運慶作諸仏

寺家地区にある願成就院は、北条時政が源頼朝の奥州藤原氏攻めの戦勝祈願のために建立した寺院である。同寺院には、国宝に指定されている仏像5軀(木造阿弥陀如来坐像・木造毘沙門天立像・木造不動明王及二童子立像・附 五輪塔形木札)が伝来している。

これらの仏像は、文治2年(1185)に北条時政が願主となり、仏師運慶が造像したものであることが、胎内銘札の記述から確認されている。また、運慶が比較的若い頃に制作した仏像であり、その後の運慶及び慶派の作風を確立した作例として、高く評価されている。



国宝
木造不動明王及二童子立像



国宝
木造阿弥陀如来坐像



国宝
木造毘沙門天立像

イ 重要文化財江川家住宅

幕末の菰山代官江川英龍を輩出した江川家が、代々居住した住宅。築400年と推定される梁間10間、桁行13間の主屋をはじめ、表門・裏門・書院・仏間など計15棟が重要文化財に指定されている。これらの建造物は、公益財団法人江川文庫が所有・管理しており、部分的に一般公開されている。

また、江川家住宅の敷地は、菰山代官所が置かれるなど、中世から近代にかけて地方行政の中心的な場所であったことから、菰山役所跡として国の史跡に指定されている。さらに、江川文庫が所蔵する古文書・書画・典籍・武器武具類の内、38,581点が重要文化財菰山代官江川家関係資料、古写真461点が重要文化財江川家関係写真として指定を受けている。



主屋



史跡菰山反射炉

ウ 史跡菰山反射炉

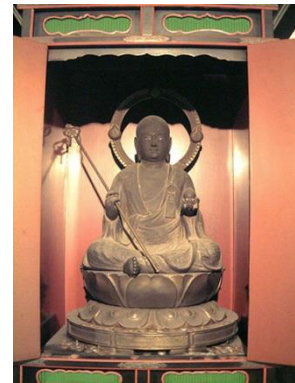
江川英龍が築造を指揮した、品川台場に配備するための鉄製大砲鑄造を目的とした西洋式の金属溶解炉。実際に稼働した反射炉としては唯一現

存し、国指定史跡となっている。また、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産として、世界文化遺産に登録されている。

(2) 主な県指定文化財

ア 願成就院の木造地藏菩薩坐像

願成就院には、寛喜3年(1231)の朱書き銘を持つ「木造地藏菩薩坐像」がある。この仏像は、北条政子の七回忌にあたって、鎌倉幕府第3代執権北条泰時が奉納したものと伝えられている。通称「政子地藏」として知られており、静岡県の指定文化財となっている。



木造地藏菩薩坐像(願成就院蔵)

イ 本立寺の梵鐘

金谷地区にある本立寺には、円成寺を開いた覚海円成が鎌倉東慶寺に寄進した、元徳4年(1332)銘の梵鐘(吊輪龍頭・裾唐草)が伝来している。本堂南西の鐘楼に懸けられており、静岡県の指定文化財となっている。



本立寺 梵鐘

(3) 主な市指定文化財

ア 中世在銘石造物群

中條地区の守山南麓に位置する眞珠院には、五輪塔や磨崖仏など、紀年銘のある中世の石造物が5点伝来しており、「中世在銘石造物群」として市の指定文化財となっている。その内、五輪塔「定仙大和尚塔」には、正安4年(1302)の銘が刻まれている。これは、静岡県内の五輪塔では、最も古い紀年銘である。



五輪塔「定仙大和尚塔」(中央)

イ 白石の石棺

白石の石棺は、長岡地区にある洞古墳の埋葬施設であり、古墳時代終末期後半(7世紀中葉~後葉)の築造と推定される。形式は、家形の蓋石があり、横側に開口部を持つ「家形式石棺系横口式石槨」である。畿内中軸部の有力古墳に見られる形式で、静岡県内には他に例がないことから、市の文化財に指定されている。



白石の石棺

(4) 主な未指定文化財

ア 韮山城跡

北条早雲^{ほうじょうそう'un いせしんくろうもりとき そうずい}(伊勢新九郎盛時・宗瑞)が築城。伊豆半島を平定し、関東地方に進出する際の本拠地となり、本城が小田原城に移った後も、戦国時代を通じて後北条氏領国の西側の拠点として、重要な役割を果たした。後北条氏の城郭に特徴的な連郭式の構造を持ち、本城及び周辺の砦^{どるい}も含めて、土塁や堀切^{ほりきり}などの遺構が良好な状態で残っている。また、天正 18 年(1590)の豊臣秀吉勢による攻城戦の際に築かれた豊臣側の付城^{つけじろ}の遺構も、複数箇所確認されている。



韮山城跡

イ 江川家墓所

江川家の菩提寺である金谷地区の本立寺^{ほんりゅうじ}には、江川家の墓所がある。江川英龍の墓をはじめ、近世から近現代に至る歴代当主や親族の墓だけでなく、中世以前に遡る墓石も多数存在しており、江川家の長い歴史を今日に伝えている。



江川家墓所(江川英龍墓)

(5) 伊豆の国市の特産品

ア いちご

伊豆の国市域におけるいちご栽培は、昭和 10 年代から行われていたが、戦後の農業生産の変化にともない、昭和 20 年代後半からはいちご生産者の組合が組織され、本格的な生産・出荷が開始された。

江間地区や山木地区等にあるハウスでは、「章姫」^{あきひめ}「紅ほっぺ」^{べに}「きらび香」^かなど、静岡県で開発された品種を中心に栽培が行われている。例年、12 月末から 5 月初旬にかけて観光イチゴ狩りが実施されており、首都圏をはじめ県内外から多くの観光客が訪れている。



江間地区のいちご狩りの様子

イ みかん

長岡温泉開発の中心人物の一人である大和宇平^{やまと うへい}は、明治 35 年(1902)から、市内小坂^{おさか}地区で斜面地の開墾を進めた。昭和 33 年(1958)の狩野川台風により、小坂地区の水田も大きな被害を受けたため、新たな農作物としてみかんの栽培を目指すこととなり、地元の小坂柑橘組合^{かんきつ}により改めて斜面地の開墾が行われ、昭和 35 年(1960)にみかんの苗を植え付けるに至った。

昭和 40 年(1965)頃から収穫・出荷が始まり、昭和 45 年(1970)からみかん狩りが開始された。観光農園としてのみかん狩り(小坂みかん共同農園)は、例年 10 月から 1 月初旬まで行われており、関東地方を中心に、多くの観光客が来訪する。



小坂地区のみかん狩りの様子

ウ 温泉まんじゅう

伊豆長岡温泉の土産物として、最もよく知られているのが温泉まんじゅうである。大正 5 年(1916)創業の「柳月^{りゅうげつ}」や、昭和 20 年(1945)創業の「黒柳^{くろやなぎ}」をはじめとして、7 軒の店舗で、それぞれ皮や餡に特徴のある温泉まんじゅうが作られている。毎年秋に行われている「温泉まんじゅう祭」では、通常は各店舗別にしか買えない 7 種類の温泉まんじゅうを一箱に集めた詰め合わせが販売され、人気を呼んでいる。



温泉まんじゅう詰め合わせ